

ドイツのテレビ番組「イタコ」

ドイツの国営第二テレビが津軽を放映する。ドイツ全土に紹介するのは津軽イタコの習俗である。大きなカメラ、大仕掛けな機械を空港からトラックで運んで来て、三日間で取材して行った。

ことの発端はこうだった。国際シヤマニズム学会の大会で、毎回顔を合わせる学者、クネヒト氏から「イタコを取材に恐山に行くので、世話をしてほしい」との依頼を受けた。

三月であったので、「恐山は道路が積雪で無理、行けたにしてもイタコは居ないし、もともとイタコと恐山は関係はなかったのだから」と私は断った。付け加えて、一言「川倉地藏堂にもサイの河原があり、近くにイタコさんがいますよ」と言ったのが始まりであった。

雪が所々に残っている川倉で落ち合った。中里町から来てもらったイタコが、水辺で『津軽三十三観音』を唱える姿を先ず収録した。三千体あるという地藏、七百体の冥婚人形、その数の多さに度肝を抜かれ、ただならぬ靈気がただよう妖気を感じてか、彼らは憑かれたようにカメラを廻していた。

続いて、口寄せ、加持祈禱をイタコ宅で収録した。同行してくれた私の同僚と同僚の姉が依頼者となってくれた。板柳町では、もう一人のイタコのホトケ降ろしと、依頼者の大善寺詣りの収録に立ち会った。そこまでは私が約束したことであり、責任は果たしたのであった。

彼らは、どうしても、恐山だ、遠くからでも山の姿を撮るのだという。その熱意の熱さで雪が解けたのか、霊場まで行くことが出来たと、後で報告を受けた。

硫黄のため樹木が生えず荒涼とした風景は、誰もあの世を見て来て、知らせてくれたのではないのに、死後に行く世界の風景なのだそうである。そればかりではない、実際、そこには死者の靈が集まっているらしいのである。そのために、たやすく靈を呼びだして、二・三分で「口寄せ」を済ませることが出来るのである。本来は十分以上かけて、『神寄せ』、『ホトケ呼び』の経文を唱えて、地獄を探し、極楽へおもむいて死者の靈を探し出し、口説き、『ホトケ送り』『神送り』をしなければならぬはずであるのだが。

日本の宗教学者たちの中にも、恐山にイタコが住んでいると誤解している者がいる。文化庁の委嘱で研究仲間と調査した一九八〇年代、下北在住のイタコは二人しか居らず、彼女らは恐山には出向いていなかった。イタコと恐山が結び付けられてしまったのはマスコミ、特にテレビの歪曲された報道が原因であった。

似た現象として指摘したいのは、ネプタ・ネプタにおけるプ・ブの区別である。この差異は作為的であり、過去に遡り得る歴史的な事実ではない。獅子踊を「熊」と「鹿」に二分する分類法も同じである。視点を变えるが、明治六年にイタコは政府の通達で禁じられた。一つの国家として統一するために障害であると考えられた地方文化であった。再び私たちは市町村合併を強いられ、地域の独自性を失うのではないかと危惧している。

文化の基底にあるのは土地固有の精神性である。そこに着目して紹介しようとしているのがドイツの国営テレビである。放映後のビデオを送ってくれる約束。誤解なく収録してくれているだろう。試写会を催し、皆で観たいと思っている。